



ライフ

ライフセーバーというと、海水浴場で救命処置を行う人というイメージがある。しかし、海辺だけでなく日常生活のさまざまな場面で、応急手当などが必要なときも、ライフセーバーとしての知見、経験は生かされる。

2022年9月、京王井の頭線の永福町駅（東京都杉並区）で人命救助にあたり、そのことを実証した中央大学ライフセービング部の大谷純加さん（法4、当時3年）が、東京消防庁から感謝状を贈られた。

大谷さんは「手当てをした男性が社会復帰されたと聞き、本当に良かったという気持ちです。ただ、私は非医療従事者であり、ライフセーバーという資格があるからできた行動とも思っほしくない」と振り返る。ライフセービング部での一次救命処置の手技手法の訓練とともに、2022年春学期の法学部「生命倫理」の講義を通して、海水浴場だけでないあらゆる場面での事故の心構えを学べたことが、躊躇なく人の命に向き合う姿勢に結び付いたと訴えている。

「ライフセーバーは 日常のあらゆる場面で 活動できる」 人命救助で実証

セービング部の大谷純加さん(法4)に消防総監感謝状



▲感謝状を贈られた大谷純加さん。右手前は杉並消防署の岡田一将署長

「何か手伝えることは
ありますか」
十数分間、
救命処置にあたる

永福町駅で停車中の電車に乗っていた大谷さんが事態に気付いたのは、9月10日午前8時40分ごろ。ホームから「AED(自動体外式除細動器)を持ってきました」という駅員の声が出て中高年の男性が倒れたことを知り、電車を降りた。当時はライフセービングの大会に向かう途中だった。

電氣的除細動や、医療従事者に限らず誰でも行える気道確保、心臓マッサージなどの心肺蘇生法(一次救命処置)がいかに早く行わ



▲消防総監感謝状を手渡される大谷純加さん
=2022年11月11日、杉並消防署

れるかが生存率に大きく関わる。職員ら6、7人が救護に携わり、男性の胸骨圧迫も始めていた。事態はあわただしく切迫していた。

大谷さんは「ライフセーバーですが、何か手伝えることはありますか」

と職員に声をかけ、救急隊到着までの十数分間に、全体への指示や呼吸や脈、体動の確認を行った。新型コロナウイルスの流行で一次救命の人工呼吸は原則として行わないという決まりがあり、まずAEDを装着し、8時45分に1回目のショックを実施した。

別の乗客の女性や職員が協力して探した保険証から男性の名前や年齢が分かり、名前を呼びながらの声かけもできた。そして8時50分過ぎに到着した救急隊員に、一次救命の間の男性の様子やAEDショック回数(計4回)などを含めた情報を引き継いだ。

「学問を机上の空論にしない」 小峯力教授から 「生命倫理」の学び

今回の経験を経て、「応急手当ての必要な場面は、海水浴場だけでなく日常にある」と身をもって痛感

した。春学期に法学部の「生命倫理」を受講していなければ、海辺の事故の心構えしがなく、今回の事故に対応できなかったと感じている。講義を担当し、ライフセービング部の部長も務める小峯力教授(救急救命学)が「学問を机上の空論にしない」と呼びかけていたことを改めて思い出したという。

公益財団法人「日本ライフセービング協会」が発行する資格は、「サーフ・ライフセーバー」という水難救助のイメージである。しかし、同協会の前理事長で、現在スーパーバイザーを務める小峯教授は、夏だけでなく、春夏秋冬に生かされる資格でなければならないと訴える。つまり年間を通じた「暮らしのファーストレスポnder」として、未然防止から確かな一次救命者であるべきと願いを込める。

「男性本人が助かったことは何よりですが、その存在を必要とすること(ご家族のもとに戻せたこと(社会復帰)こそ最上の喜びです。その



予後(病気や治療がたどった経過)を決定する病院前救急救命を担えると、大谷さんが証明した。人が人を救う、その行為をあたりまえにする社会でありたい」と、小峯教授は話している。

ライフセービングの根底に「利他と慈愛の精神」

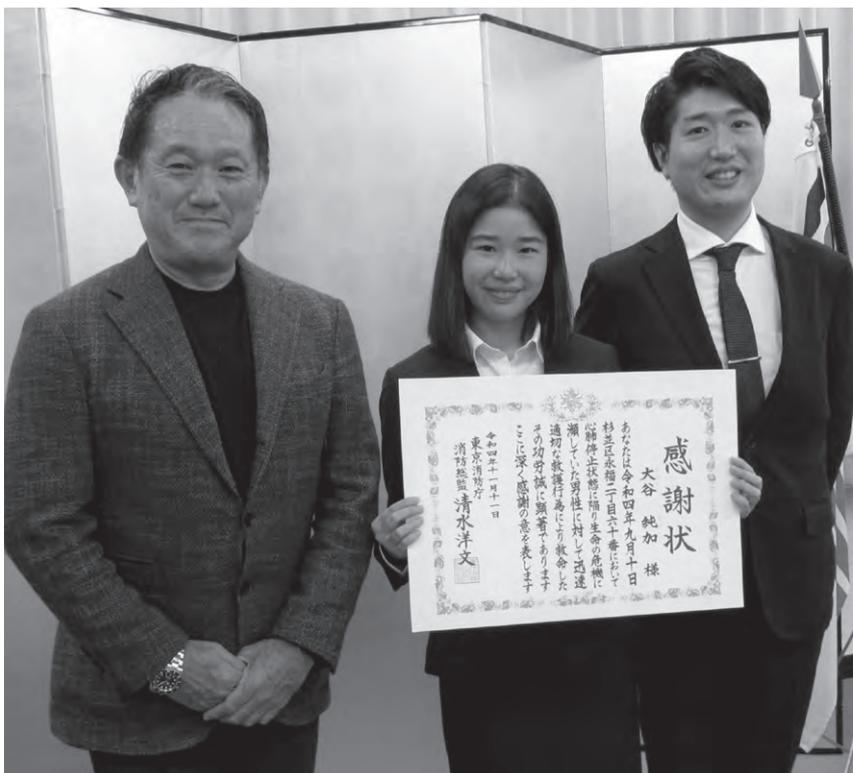
救急救護功労者贈呈式は11月11日に杉並消防署で開かれ、大谷さんと、京王井の頭線永福町駅駅員の石井武敏さんに、東京消防庁の清水洋文消防総監名の感謝状が贈られた。

大谷さんは「男性が社会復帰され、ご家族のもとに戻せたことが本当に良かった。ライフセービングの根底には、利他の精神と慈愛の精神があると思いますが、これらは両親から授かったものと考えています。それを小峯先生をはじめとするライフセービング部の関係者

と仲間たちが、部の活動や生命倫理の授業を通じて成長させてくださった」と感謝の言葉を述べた。

石井さんは「大谷さんの機敏で適切な行動は本当に助かりました」と振り返り、2人に感謝状を手

渡した杉並消防署の岡田一将署長は「倒れた男性は一命を取り留め、既に退院された。現場での適切な対応に改めて感謝します」と話していた。



▲大谷純加さんは当時、ライフセービング部で主務を務めていた。
左は小峯力教授(ライフセービング部部長)、右は遠藤航副部長



☆中央大学 学友会体育連盟ライフセービング部

1988年創部。年間を通じて病院前救急救命の理論と実践を展開。夏期休業期間は全国の海岸で監視救助活動の任務にあたる。多摩キャンパスのプールや、湘南、千葉、静岡などの海岸で練習を重ねている。

全日本選手権、大学選手権(インカレ)などの大会に出場。ともに速さを競う「ビーチフラッグス」「ボードレース」などの競技の根底には、「ゴールの先に救う命がある」という考えがある。



「なんて素敵なおファンタジー」

選手と並び国歌を歌う

車椅子で一人、W杯開催国のカタールへ

サッカー部の持田温紀さん(法4)

選手とともに国歌を歌った持田温紀さん＝2022年12月1日(現地時間)(写真提供:共同通信社)▲

多摩キャンパス国際教育寮に住み、車椅子生活を送りながら学業などに励む法学部4年、サッカー部所属の持田温紀^{ほるき}さんが2022年11~12月、サッカー・ワールドカップ（W杯）の開催国、カタールを1人で訪れた。

試合前のセレモニーで国歌斉唱する日本代表選手の列に加わり、国際サッカー連盟（FIFA）のサイトで紹介されたり、国内外のメディアに記事が載ったりと、20日間の滞在中、信じられないような出来事が続いた。フォロワーが29人だったツイッターで、国歌斉唱の際のハプニングを紹介すると、6万を超す「いいね」がついた。

「一生、記憶に残る経験でしたが、これを人生の“最高点”にしてはもったいない。グローバルな視点を持ち、世界を旅して、世界で活躍する人になりたい」。持田さんは未来へ夢を広げている。

吉田キャプテン 「一緒に歌おう」

「あなたをセレモニーに招待します。どうですか」

日本のグループリーグ2試合目のコスタリカ戦の日、FIFAの服を着た人から、座席で声をかけられた。車椅子の人をセレモニーに招待する取り組みをFIFAが行っていることは後で知った。厳重なゲートを通して、ピッチサイドから見た光景、選手の姿はひときわまぶしかった。くしくも11月27日というこの日は、5年前に車椅子生活が始まった日だった。

3試合目のスペイン戦でもFIFAの人に声をかけられた。グループリーグ最終戦のこの日はエスコートキッズや、スペインの車椅子の人と同じように、選手の近くに並んだ。そして最大のサプライズがやってきた。

日本の国歌斉唱が始まる直前、吉田麻也主将が「一緒に歌おう」と車椅子を選手の列まで引いてくれたのだ。吉田主将の思いやり、心遣いに感謝した。喜んでいるような、泣いているような、感極まった表情で君が代を歌い、「うれしさも感動も、あらゆる感情が人生で一番あふれた瞬間だった」という。

優しかった カタールの人々

初戦のドイツ戦ではゴール裏の位置、車椅子の人のために設けられたスペースに陣取り、ほとんど日本人がいない中で、日の丸の扇子を手に、必勝の鉢巻き姿で声をからした。

日本の勝利が濃厚となったゲーム終盤は、観客席のさまざまな国籍と思われる人たちが「日本人と記念撮影したい」と近寄ってきた。「100人以上と一緒に撮ったかもしれない」と持田さん。「世界中の方々と一緒に日本代表を応援できたことがうれしかった」と振り返った。



▲開催国のカタールの人をはじめ、誰もが親切で優しかったという(持田温紀さん提供)

◀日本-スペイン戦のセレモニーに招待された持田温紀さん(手前左)(写真提供:共同通信社)

カタールへの航空券や試合のチケットは2022年11月に入って確保した。宿泊先ホテルのダブルブッキングなどで「あさってまでチェックインできない」と言われ、途方に暮れたこともあったが、空港のスタッフも会場のボランティアも優しい人たちがばかりだった。

階段の前で困っている様子を見た人たちが、「teamwork！」と声に出し、さっと集まって車椅子を持ち上げてくれたことも一度や二度ではなかった。

人権侵害について報道されるなど、大会期間中、問題が指摘されたカタール大会だが、持田さんはバリ

アフリーも行き届き、優しさに富んだ国という印象を抱いている。

出場国32カ国、いや、それ以上の国や地域の人たちが中東の国に集まった。持田さんにとって「平和」ということを強く意識した20日間だった。

商学部「Jリーグ」講座、サッカー部、海外インターンシップ 人との出会い、結びつきが「夢の舞台」へ導く

持田温紀さんは高校1年生の夏、自転車事故で脊髄を痛め、入院は1年半に及んだ。車椅子生活となり、4歳で始めたサッカーもプレーできなくなった。

家族や周囲の支えもあって中大法学部に進学。他学部履修制度を利用してJリーグについて学ぶ商学部の講座を受講し、担当の渡辺岳夫教授から「組織改革を始めたサッカー部がプレーヤー以外の役割の人材を探している」と声をかけられたことが転機となった。

サッカー部が地域企画や営業活動を行う「事業本部」という名のフロント制を導入しようと計画していた頃だった。持田さんは入部後、地域や社会貢献活動、スポンサー獲得などに携わった。

車椅子の自分でもサッカーに熱くなれる機会をく



れたチームへの感謝を抱く一方で、「車椅子という点に関係なく、結果を残して、能力があるからチームの

一員なのだと思われたい」と話す。

東南アジアでの研修で成長

サッカー部に入部して、再びサッカーと関わる生活が始まり、さらに転機が訪れる。神奈川県鎌倉市にあるサッカークラブ「鎌倉インターナショナルFC」を経営する四方健太郎さんが、主に企業を対象に行っている海外人材研修に興味を抱いた。そして、海外インターンシップとして2022年9月にシンガポール、マレーシアを訪れたのがW杯観戦の直接のきっかけとなった。

1週間の研修プログラムの中で、「一日で40人以上にインタビューする」「4時間半後に中国語で自己紹介できるようになって戻ってくる」といったユニークでハードなミッションと向き合い、海外で動き回るマインド、ヒントを培った。自分が一皮むけて成長したと実感できたという。

インターンシップ最終日、今後半年で成し遂げたい目標を参加者が表明することになり、持田さんは「W杯現地観戦」と宣言。今回、有言実行を成し遂げた。

持田温紀さん

もちだ・はるき。神奈川県・桐蔭学園高卒、法学部4年。学生会体育連盟サッカー部所属。選手と並んでピッチで国歌を歌ったことを「最大の興奮」とたとえた。スペイン戦で話題となった「三笥選手の一ミリ」のように、「最後まであきらめなければ奇跡を起こせる」という意識を今も大切に過ごしている。吉田麻也選手には「いつか直接、お礼を言いたい」という。サッカー部の事業本部で、地域や社会貢献活動、スポンサー獲得などを主導し、部を支える活躍をしたことが評価され、大学スポーツ協会 (UNIVAS) の「UNIVAS AWARDS 2022-23」のサポーターングスタッフ・オブ・ザ・イヤー最優秀賞を2023年3月に受賞した。

▲吉田麻也選手の背番号のユニフォームを着る持田温紀さん＝2023年1月19日、多摩キャンパス国際教育寮